■ 研究論文

日本の造園における借景という用語の性格と変遷

The Character and Variety of the Term of Borrowed Scenery in Japanese Gardening

周 宏俊* 小野 良平* 下村 彰男*

Hongjun ZHOU Ryohei ONO Akio SHIMOMURA

Abstract : Focusing on the term of Borrowed Scenery, this paper probes into the historic evolvement and variety of this term in Japanese gardening, in other words how this term started, evolved and changed from classical to modern times. The study here is mainly based on the literature survey on the topic of Borrowed Scenery. As a result of the survey into classical treatises before Meiji, the treatise of Cyocyukou of Muromachi is treated as the origin of the term. And then various concepts since modern times are reviewed. At the same time, the typical examples of gardens of Borrowed Scenery are summed up and the space composition is analyzed. Besides, the diffusion of the treatise of Yuan Ye in Japan is examined. Consequently, it is concluded that the term of Borrowed Scenery has been transmitted from China to Japan as the latest in Muromachi, in the field of gardening the term was obtained from Yuan Ye in Meiji, but afterward the concept of this term gradually departed from the origin and was summarized according to the character of Japanese gardens.

Keywords : *Borrowed Scenery, Concept, Composition, Yuan Ye*

キーワード : 借景, 概念, 構造, 園治

1. 研究の背景, 目的及び方法

借景は日本の造園技法における重要な概念の一つといえる。『園治』に「夫借景, 林園之最要者也」¹⁾という解説があることは良く知られ, 「借景式」という庭園の類型がなされることも少なくない。借景の研究は, 近代以来日本の造園研究の始まりとともに展開し, 多くの研究成果が示されてきた。しかしその一方で, たとえば「その概念規定さえもが人それぞれによって異なり, 明析になし得ない, いや, 山が見えれば何でも借景だとしてしまうような混乱さえきたしている状況である。」²⁾との指摘もあるように, 借景は術語・用語としてはまだ明確に整理されたものではない。さらに, 多くの研究に借景という用語は中国の造園書の『園治』から取り入れられ, 借景という技法は古くから日本の造園に用いられてきたという論述がみられるものの³⁾, 借景という用語の展開と変遷については体系的な研究はまだなされていないのが現状である。

そこで本研究は, 日本の造園における借景という用語(「借景」)の使われ方, 即ちこの概念がどのように発生, 展開, 変容したかの解明を研究課題とする。具体的には, 本研究は日本で使われて来た「借景」は『園治』という書物とどのような関連があるのか, 『園治』の「借景」の概念とどのような差異があるのか, 江戸時代から現代にかけてどのように変化したのか, 借景という概念がいわゆる借景庭園とどのように関連して論じられたのかなどについて明らかにすることを目的とする。

研究の方法は, 基本的には「借景」に関連する文献を集め, 整理し, 分析することである。その際に明治期後半から大正期における近代造園学の誕生を大きな転換点と位置づけ, その前後において若干異なる文献調査の方法を採用した。近代造園学誕生以前の概ね明治期以前に相当する時代の文献に関しては, 点数が比較的少ないものの, 可能な限り「借景」に関わる記載の認められる文献を収集した。近代造園学が現れてくる概ね大正期以降に相当する時代の文献に関しては, 主に専門雑誌と専門書から「借景」

の定義に関連性をもつ言説と造園空間の実例を集めた。

より具体的には, 文献の調査は雑誌, 庭園に関連する書籍等および古典籍の三種類を対象とした(表-1)。まず雑誌の調査は大正期に誕生した造園系の雑誌, すなわち「庭園」, 「造園雑誌」と「林泉」等を対象とした。さらに, 調査範囲を造園という分野がまだ未確立であった明治期まで広げることを目的として, 多くの美術系, 園芸系, 林学系と建築系の雑誌を対象に⁴⁾, 明治期の全体像を把握するためにキーワードを拡げて調査した。この中の「国華」, 「大日本山林会報告」など8点からいくつかの結果を得た。次に庭園に関する書籍については, 近代以来現在までの様々な庭園に関する一般専門書を精査し, 借景をテーマとする20点の章節を集めた⁵⁾。さらに小沢圭次郎と黒田譲を明治大正期における重要な庭園論者と位置づけ, 「借景」の使われた状況を明らかにするために, 彼らおよびその関係者の著作や論文から, 庭園の借景と眺望及び『園治』に関する記述を収集した⁶⁾。最後に古典籍については, 二通りの調査を行った⁷⁾。一つ目は万里集九の作品を中心とする五山文学の文集の調査で, 「借景」について1点の例を得た。二つ目は秋里離島の図会の調査であり, 結果として庭園の眺望に関するいくつかの例を収集した。

こうした文献調査に基づいて, 「借景」の概念の分類とその概念の変遷を整理し, 「借景庭園」の事例収集とその典型的な事例について空間構造を分析した。続いて現存する『園治』および既往研究に基づいて日本における『園治』の版を調べ, 『園治』の普及の経緯を分析した。さらに文学作品と文芸評論における「借景」の使用例も収集し, 造園における「借景」と比較し, この「借景」の使い方と概念を明らかにした。

2. 近代以前における借景という用語

多くの既往研究において, 「借景」という用語は『園治』という文献で初めて記載され, 中国から『園治』の伝来とともに, 日本に取り入れられたことが指摘されてきた⁸⁾。しかし, この見解

* 東京大学大学院農学生命科学研究科

表－１ 調査対象とした文献および結果

	調査対象		時期	調査方法	結果
雑誌	造園分野	「庭園」（「庭園と風景」、「庭園と風光」）	1918年から1944年まで	借景をキーワードとする全文調査	借景を指摘した論文66点
		「造園雑誌」（「造園学雑誌」、「ランドスケープ研究」）	1925年から現在まで		
		「林泉」	1935年から1944年まで		
	美術分野	「国華」	1889年から1907年まで	借景、「園治」、眺望をキーワードとする全文調査	借景、「園治」あるいは眺望を指摘した論文あるいは記事44点
		「日本美術協会報告」	1888年から1910年まで		
		「京都美術協会雑誌」（「京都美術」）	1899年から1906年まで		
	園芸分野	「大日本美術新報」	1883年から1887年まで		
		「日本園芸会雑誌」（「日本園芸雑誌」）	1889年から1914年まで		
「園芸之友」		1905年から1926年まで			
ほか	「大日本山林会報告」（「大日本山林会報」）	1882年から1925年まで			
	「建築雑誌」	1887年から1928年まで			
庭園に関連する書籍	一般専門書	「庭造百題」、「日本の庭園」、「日本庭園」、「日本式庭園」、「借景と坪庭」、「庭と空間構成の伝統」、「庭（日本の美術）」、「庭園論Ⅰ」、「日本庭園要説」、「庭の文化史」、「造園大辞典」、「庭に生きる」、「造園修景大事典」、「最新造園大百科事典」、「造園用語辞典」、「日本庭園史新論」、「間の美学—日本の表現」、「借景（日本の美術）」、「日本の庭園と風景」、「日本庭園辞典」	近代	借景に関する章節、タイトル調査	借景に関する章節20点
	小沢圭次郎らを中心に	「明治庭園記」、「園苑源流考」、「園芸考」（横井時冬）、「日本名園図譜」（本多錦吉郎）	明治大正	借景、「園治」、眺望をキーワードとする全文調査	借景、「園治」あるいは眺望に関する章節35点
	黒田譲らを中心に	「名家歴訪録」、「江湖快心録」、「続江湖快心録」、「続続江湖快心録」、「京都名勝記」	明治大正	借景、「園治」、眺望をキーワードとする全文調査	眺望に関する13点
古典籍について	五山文学を中心に	「五山文学新集」、「帳中香」	鎌倉室町	借景をキーワードとする全文調査	借景に関する1点
	秋里離島を中心に	「都林泉名勝図会」、「都名所図会」、「拾遺都名所図会」、「日本風俗名所図会」索引	江戸	借景、「園治」、眺望をキーワードとする全文調査	眺望に関する8点

を疑わせる証拠がいくつかあることも明らかである。実際に、中国文献で最初に「借景」に言及したのは『園冶』ではなく、黄庭堅の詩集に収録された「借景亭」である⁹⁾。さらに『園冶』の伝来より前に日本に渡った漢籍のうち、黄庭堅の詩集に加えて宋代の宝曇の『橘洲文集』、元代の陰時夫の『韻府群玉』¹⁰⁾なども「借景」に触れている。そのため、日本における「借景」の起源に関しては再検討する必要があると考えられる。

黄庭堅の詩集は『園冶』より早く日本へ伝えられ、特に京都と鎌倉の禅宗寺院を中心とした五山文学に多大な影響を与えたことが、当時の「東坡（蘇軾の号）、山谷（黄庭堅の号）、味噌、醤油」¹¹⁾という言い方からも窺われる。鎌倉中期から室町末期にいたる五山文学では、当時の五山派学問僧の創作した漢文学が中心であり、杜甫、蘇軾などの数多の中国詩人は崇拝され、様々な抄物が残された。このなか、黄庭堅の詩集に関して惟肖得巖、江西竜派、万里集九などの室町中期以降の代表的五山禅僧の多くは黄庭堅の漢詩を講抄した¹²⁾。

このうち万里集九の『帳中香』という抄物は黄庭堅の漢詩を抄録し、漢文で注釈した講義録である。このなかで万里は「借景亭」という漢詩を詳細に解説し、「借景」について発音と意味の両方について「借字二音、其一子夜切、見毛兎并韻府、去聲禡韻、東坡句云一夜清光天所借、又云白酒已儘誰能借、又草履曰不借、是等也。其一資昔切、見毛兎并韻府、入聲、入聲陌麥、昔左傳曰願借助焉、又高祖紀云從田橫藉助兵入（關）、藉與借通用。今借景亭之借、以入聲為優、詳見序並詩中之義也、借用他人之景也」¹³⁾と解釈した。ここで「借景亭」の「借景」は「借用他人之景」と解釈され、「借」は「入聲」の発音で借りの意味ではなく助の意味と解説された。確かに、万里集九が参考した『韻府群玉』では「借」という字は「去聲」と「入聲」の発音の異により二つの意味に解釈されたが、この「借景亭」における「借」はその使い方からみて借りの意味に解釈してよいと考えられる¹⁴⁾。

万里集九（1428-？）は室町中期の五山学問僧であり、五山文学の重要な担い手の一人であった。この『帳中香』という抄物は万里が1485年から1488年までの江戸に滞在した三年間に黄庭堅の漢詩を講義し、整理した講義録である¹⁵⁾。一般にこのような抄物は写本として寺院に所蔵され、広い範囲に普及しないのが通

例である¹⁶⁾。しかし『帳中香』の場合は、現在室町末期の写本以外では慶長・元和年間の刊本がみられることから、少なくとも江戸初期頃には刊行されていたといえ、一定の範囲に影響力をもちたことが窺える。また万里自身も漢詩の作家であり、数多の詩を作り、『梅花無尽蔵』という詩集が現在も知られる。ここに収められた数多くの漢詩に「借景」の記述をみることはできないが、「借」という字は多く使われている。たとえば、巻三の上の部分だけでも「借」は多く出現し、「太平寺里一僧房、借得明朝掛鉢囊」¹⁷⁾、「洗儘玉堂雲霧腥、蠻材獨借雨聲聽」¹⁸⁾などの9例が挙げられる¹⁹⁾。

この他に、いくつかの既往研究に指摘されるように、喜多村信節（1783-1856）の1830年の『嬉遊笑覧』に「借景」に関する記述がみられる。『嬉遊笑覧』には『園冶』の内容の紹介とともに「借景」も言及され、「借とは園は内外を分つといへども、景を得むことは遠近に拘ることなく、晴巒聳へ秀紺宇空を凌ぐ極目俗ならばこれを屏く、是巧にして体を得るものなり。又云借景は園林の最肝要なり、遠借、隣借、仰借、俯借、応時て借る物情逗る所目寄て心期す。其意筆の先にあり描写するが如しなどいへり」のような『園冶』からの訳文が載せられ、これは日本で初めて『園冶』を紹介したものとされている²⁰⁾。

以上から、日本古典籍からは二つの「借景」の例を抽出することができた。『園冶』の「借景」以前のもので、『帳中香』における「借景」が唯一の例として確認された。あくまで調査した範囲内で確認されたに過ぎないが、『帳中香』の「借景」は『園冶』の「借景」に先立って持ち込まれた日本における「借景」の濫觴として位置づけることができる。

3. 「借景」に関する明治期の様相

（1）概要

明治期の文献では、7点において「借景」についての言及が確認された（表－2）。横井時冬の1889年の『園芸考』が最初の例である。このほかに小沢圭次郎、湯本文彦、森鷗外、古宇田実と本多錦吉郎の論文や著作が挙げられ、ほとんどは庭園に関する専門書と論文である。これらの文献に、伏見山莊、天竜寺と西翁寺などのいくつかの庭園が借景が用いられた庭園として紹介され

表－２ 「借景」に言及した明治期以前の文献

発表年	文献名・著者	指摘庭園	参考文献
1489頃	「帳中香」万里集九		「豫章黄先生文集」
1830	「嬉遊笑覧」喜多村信節		「園治」
1889	「園芸考」横井時冬		「園治」
1891-1902	「園苑源流考」小沢圭次郎	石田別業、伏見山荘、高山寺、天竜寺、金閣寺、清泉寺、修学院離宮、妙法院、詩仙堂、浴恩園、円乗院	
1894	「原氏園亭遊覧ノ記」小沢圭次郎	品川原氏庭園	
1895	「平安通志」湯本文彦	天竜寺	
1896	「園芸小考」森鷗外		「園治」
1906	「庭暇き」古宇田実	天竜寺	「平安通志」
1911	「日本名園図譜」本多錦吉郎	西翁院、成就院	

た。この中で小沢圭次郎の見解が特に注目されるので次節で詳述する。

またこの時期、「借景」が登場し用いられた状況に対し、「見渡し」などの様々な言葉も使われていた。江戸末期の秋里籬島と明治大正期の黒田譲の著作に数多の庭園は言及され、庭園の眺望に関する記述も多くみられたが、そこに「借景」は一切見出せない。小沢などと比べると、秋里や黒田などは借景という言葉はまだ認識していなかったものと推測される。

1868年以前において、「借景」は既に前章で検討したように文献に認められるがまだ稀なものといえる²¹⁾。明治期に入っても、「借景」はまだ常用されるには至らずに、「見渡し」などの言葉と混在して用いられていたことが確認できる。このことから、明治期は「借景」の発端期と位置づけることが妥当と思われる。

（２）小沢圭次郎の「借景」と『園治』

小沢圭次郎（1842-1932）は日本の近代における造園研究の先覚者という評価が定着している²²⁾。1890年から1906年にかけて小沢が雑誌『国華』で141回連載した「園苑源流考」の長編論文は、日本における造園研究の最初の傑作といえる。この論文には、概ね時代順に、多くの歴史的庭園の例を骨子として園記と園詩などの膨大な史料が集められ、様々な論述と評論が行われた。さらに庭園の考察だけではなく造園古書などの紹介も含まれる。

この論文に、様々な庭園の眺望、即ち園内から園外への眺めへの言及が多くみられる。引用された数多の園記にも庭園の眺望に関する記述がみられ、これらはすべて「借景」ではなく眺望や遠眺などの言葉が用いられている。この点は中国の園記の状況に似ているといえることができる²³⁾。また積翠園に関する村瀬之熙の「憑欄楯而窮遠眺、攬萬象於眉睫」²⁴⁾、と六義園についての僧大浄の「此二憩ヒテ前後ヲ眺望スルニ、庭中ノ思ヒニハアラテ、寂寞タル深山ニ遊フカコトシ、此岳ヨリ西南ニ、芙蓉峰ヲ正面に見ル、則チ此庭中ノ茂林ヨリ、直ニ芙蓉ノ裾マテ續クカコトシ、絶景云フヘキ様ナシ」²⁵⁾などにみられるように、視覚における錯覚についての認識の存在を確認することができる。

なお、小沢はそのような庭園の眺望に関して、以下の具体的庭園の眺望を借景との繋がりから論じた。石田別業、伏見山荘、高山寺、天竜寺、金閣寺、清泉寺、修学院離宮、妙法院、詩仙堂、浴恩園および円乗院である。小沢は清泉寺に関して、「清泉寺ハ城南伏見ニ在テ遙臨遠眺ノ借景観望ニ富ミ」²⁶⁾と記し、藤原實岑が「眺望風光如有待、玉欄映對滿山紅」²⁷⁾と描写した修学院離宮の「眺望」に関しては、「其眺望敏豁達風光遼遠ニシテ借景ニ富瞻ナルコトハ西京名園中ニ冠絶セリ」²⁸⁾と述べた。これらの記述から、小沢は「借景」を概ね「眺望」の同義語として用いていたといえることができる。

さらに同論文には「借景」の定義も見いだせる。「凡ソ園治ノ方略ニ於テ、天工人ヲ湊合スルニ、兩様ノ別有り、一ハ天景ヲ

借りテ、人工ヲ資クル者トシ、一ハ人工ヲ加ヘテ、天景ヲ糺フ者、前者ハ則チ漢土ニ在リテ、之ヲ借景ト稱シ、邦語ニテハ、之ヲ見越ト云フ、借景トハ園外ノ景物ヲ借り來リテ、園中ノ瞻望ニ供スルノ謂ナリ、見越トハ近ク眼前ニ見得ル所ノ景物ヲ超越シテ、其上端若ク其間隙ヨリ、遠方ノ景象ヲ眺覽スルコトニテ、俗ニ見越ノ富士ト云ヒ、見越ノ松ト云フノ類即チ是ナリ。」²⁹⁾そして石田別業を借景の嚆矢と評価した。この定義では、中国から伝来した「借景」は眺望に近い意味として解説されている。これは日本語の「見越」に当たるが、中景が存在するかしないかにより「見越」から区別された。類似のものとして妙法院の景観に関する論述では、妙法院の十二景の中の一部は園内の景色ではないことが指摘され、「所謂借景ト云フ者ニテ園外ノ景物ヲ假借シ來リテ以テ園中賞玩ノ勝概ニ充テシニ過キサルナリ」³⁰⁾として「借景」の定義が示された。この定義では借景は園内から園外までの眺望に過ぎないといえることができる。こうして橘俊綱が庭園の地形眺望論に挙げた石田別業は借景の嚆矢と評価された。

小沢は「借景」を園外までの眺望としたが、ただし単なる視覚の範囲にとどめなかった。上述の妙法院の十二景の中では「西山夏雲」のような園外の眺望のほかに、「青田乱蛙」や「蕭寺遠鐘」という情景が描写された³¹⁾。「乱蛙」と「遠鐘」は視覚ではなく聴覚の体験であることが明らかなものの、小沢はこれを借景としている。これは『園治』の中の「蕭寺可以卜鄰、梵音到耳。遠峰偏宜借景、秀色堪餐」³²⁾に当たると考えられる。こうして、借景の範囲は視覚だけではなく聴覚にも及び、比喩的な抽象性を帯びていた。

しかし、小沢の「借景」の具体的な使い方にはある程度の曖昧性がみられる。上述の造園の人工と天景の関係についての記述では、造園の方略は「天景ヲ借りテ、人工ヲ資クル者」と「人工ヲ加ヘテ、天景ヲ糺フ者」の二つに分けられ、前者は借景と規定されたのに対して、後者は自然の景勝地を立地に選定し自然の風景を基調とし人為の築造と植栽を加えることと規定された。後者の典型として高山寺の例が挙げられた³³⁾。一方同時に小沢は、高山寺の立地を選定し建築を配置する意匠について「高山寺ノ七境ハ前記ノ如ク人造ノ泉石ニ非スト雖モ明恵上人ノ襟懷ハ瀟灑出塵ナルヲ以テ敢テ樹ヲ植ヘ石ヲ立テ泉ヲ引キ山ヲ築ク等ノ事ヲ為サズ自然ノ谿山好處ニ就テ草庵ヲ點綴シ以テ幽栖ノ所ト為シ化工ノ活畫中ニ遊憩セラレタル者ト謂フヘシ」³⁴⁾とも記し、現地の天然風景を、利用する前者の借景の内容に相当するものとして位置づけている。

以上から、小沢が用いた「借景」は厳密に系統的なものではなかったとみられる。このような「借景」の使い方はある程度『園治』における「借景」に類似したものといえることができる。小沢は『園治』という書物について一切言及していないが、「園治」という言葉を用いている。たとえば同論文には「建築園治ノ材料」³⁵⁾という言葉が、作庭の意味として使われている。その他、上述の定義に「園治」ではなく「園治」という言葉も用いられているが、この「治」は「治」と同じ意味である³⁶⁾。また、小沢の別の「公園論」という論文では「雖系人作宛自天開」という『園治』からの引用文もみられる³⁷⁾。これらのことから、小沢は『園治』という書物の知識があったことはもちろん、借景の用語を『園治』から取り入れたものと推測される。

さらに、概ね同時代の別の文献においても、そこで使用された「借景」の出処がやはり『園治』であることが窺える。既にみたように江戸末期の喜多村信節の『嬉遊笑覧』では、『園治』の内容の一つとして「借景」が紹介されている。明治期の横井時冬の『園芸考』（1889年）と森鷗外の『園芸小考』（1896年）では、『園治』の紹介とあわせて「借景」が言及されている。したがって、これらの時期に「借景」は『園治』から取り入れたものと考えられる。

(3)「見渡し」の伝統

庭園からの眺望ということに関しては「借景」以外にも表現の形式があり、たとえば秋里籬島は天竜寺の嵐山の眺望について、夢窓疎石が「天竜寺方丈の集瑞軒より雪のふりける日あらし山をみわたして雪ふりて花かとみゆるあらし山松と桜ぞさすがかはれる」³⁸⁾と書いて、「見渡し」という言葉を用いたことを伝えている。

秋里籬島は江戸末期に十人以上の名所図会を出版し、「名所図会」に先鞭をつけ、『都名所図会』をはじめ多くの名所図会を著わし、その後の名所地誌に少なからぬ影響を与えた³⁹⁾人物である。この中で『都林泉名勝図会』は京都の庭園に関する図会の代表といえ、多くの庭園について園外の自然と風景まで含めた描写がなされている。その「凡例」には「法則によって遠景を取、庭中は都て其遠景を図し」⁴⁰⁾と記され、「取」即ち「とる」が用いられた。

『拾遺都名所図会』では円通寺について、「東の方より比叡山を庭中へ採り」⁴¹⁾とあり、「取」と類似の「採」即ち「とる」という動詞が用いられた。ことに秋里は「壮観」、「奇観」と「妙境」などの名詞を用いて、清水寺延命院、円養院と松花堂などの庭園の眺望を描写し賞賛した⁴²⁾。これらの用法から、秋里が庭園の眺望に期待したのはその雄大さと巧妙さであったとみることができる。

次に黒田義は、明治大正期に京都の美術文学界で活躍し、当時京都の芸術界と交流が深く、雑誌の編集や『名家歴訪録』、『江湖快心録』、『京都名勝記』などの数多の著書の出版で知られる⁴³⁾。これらの著書に庭園に関する記述が多くみられ、眺望についての記述として、「借景」に代わって「とりこむ」、「とる」、「見渡し」などの言葉が用いられている。無隣庵の東山の眺めに関しては、「然しこう見渡した処で、此庭園の主山といふは喃、此前に青く聳へている東山である」⁴⁴⁾と記され、夢窓と同じ「見渡し」という言葉が用いられている。また円通寺の比叡山の眺望に関しては、「東の方より比叡山を庭中にとり風光絶佳にして」⁴⁵⁾と描写され、秋里が描いた「東の方より比叡山を庭中へ採り」と一致した捉え方であるといえる。

小沢の論文においても、庭園の眺望に関して「借景」と共に「見渡し」が用いられている。伏見殿の眺望について、「又苑外ノ眺望ニ富ミタル形状ハ増鏡ノ文ニ野山ノ景シキ色ツきたるに伏見山田面に續ク宇治の川浪はるくと思わたされたる程いと艶あるをト云ヘルヲ以テ所謂借景ノ佳絶ナリシコトヲ徴スルニ足ルナリ」⁴⁶⁾と記されるなど、「借景」と同様の意味で「見渡し」が用いられている。

このように、庭園の眺望の場面を「見渡し」などにより描く表現が古くから存在しかつ継承されていたことが推測される。庭園から園外の外景を眺望することは単純な行為といえるが、これに対して「見渡し」などの言葉には比喩の修辭性が与えられていることをみることができた。即ち、庭園の眺望は園内と園外の視線的な結びつきに過ぎないが、庭園も外景も本来のように存在している一方で、「見渡し」「とる」「とりこむ」などの言葉は、外景が向こうから庭園へ移されることを意味していると考えられる。これは「借景」の「借」の修辭性と共通するといえることができると考察される。

4. 近代以降造園研究における借景の概念及び構造

(1) 造園研究の発端

日本における造園学の発端は大正期であるといえる。しかし、明治期にはすでに分野としての萌芽がみられたといえる。

大学における造園学の嚆矢は東京帝国大学で20世紀初頭に開講された造園学講座であった⁴⁷⁾。原熙は大正初年に『園治』から造園という成語を取り入れ、造園学という講座を開講した⁴⁸⁾。その後、東大における造園学教室が設立されたのは1920年ごろである。学会と専門雑誌の発足に関してみれば、日本庭園協会の設

立と雑誌『庭園』の発行は1918年ごろのことであり、上原敬二によって1925年に『造園学雑誌』が発行された。

しかし、これに先立って大学ではなく専門学校において庭園についての教育課程がすでに1910年ごろ開設されていた⁴⁹⁾。さらに、いくつかの専門書あるいは専門論文も出現していた。すでに触れた横井時冬の1889年の『園芸考』と小沢圭次郎の1890年から1906年まで掲載された『園苑源流考』はその嚆矢である。明治期と大正初期における数十点の論文は主に美術、園芸、建築類の雑誌に掲載された。この中、田村剛と上原敬二は1916年から『大日本山林会報』に「造園術と林学」、「森林美学と造園術」、「造園の起源と芸術としての造園」などの論文を発表し⁵⁰⁾、これらが日本における近代造園学の胎動であったと考えられる。これらの論文では、造園学を他の林学などの学科から区分し、造園という概念と学科を確立する努力が見られる。また近代造園学は大正期に始まったことがここにも示され、さらに当時の造園学の中心は庭園研究であったということが判る⁵¹⁾。

田村と上原は造園という概念と他の諸学科の関連を解析し、造園の歴史をまとめ、造園の体系的な内容を拡充し、造園学の諸概念を確立した。ことに様々な概念の規定が論述の中心に位置付けられた。この中で造園の概念を確立することが最も重要とされ、議論の中心は造園とは何かということであった。その中で借景の概念についても議論され、借景とは何かということも研究課題となった。「借景」を規定することが造園学の発展と軌を一にしていたといえる側面もある。

(2)「借景」の定義から見る借景の概念

明治期以来、近代の造園研究の発端と展開とともに、庭園史、造園技法と造園評価などの学術著作が見られるようになり、借景についての専門書や借景を研究テーマとする論文も多く発表されるようになった。この中に、数多の「借景」の定義あるいは定義に準じる概念規定を見ることができる。

すでに触れたように、小沢の借景の論述は日本造園における最初の定義といえる。小沢の「借景」は「眺望」に近く、いわゆる「見越」と異なり、現在借景の要件とされることも多い中景や見切りの存在については主張していない。この中景や見切りの操作に関して、小沢の『園苑源流考』に引用された広瀬政典の『鷗巢記』には「有樹之繞而翳焉者、則頻剃旁、大者斧之、小者鎌之、整然如剪馬鬣、高與欄腰齊。舟之上下於墨水、其近者、樹身為之遮隔、彼不伺我、而我得姿聞觸觸欸乃之聲、其遠者、彼之見我、不詳我所存、而我之望彼風帆雨篷、以增益我觀、是以在我者無傷、而取彼者可喜者也、巧矣哉」⁵²⁾と記されている。この操作によって、中景としての刈込が作られ、園外の近くの景物を隠し、遠景を見せる、眺望の楽しみと庭園のプライバシー性が巧みにバランスした意匠の極みが述べられているが、このような『園治』に見られない意匠を小沢は「借景」とは呼ばなかった。

小沢の次に、田村の「借景」の定義は1920年の論文「造園美としての自然と人工」に示されており、「借景や背景を利用して園景をこれと調和させるためには、庭園布局から考案するべきであって、そのために独特の意匠を出すこともある。そんなに著しくない場合でも、通景線を園外に延したり、園外の醜悪なものを隠閉したり、するために、局部の配置を変化せしめることは常である。そして園の境界として生垣や植込を造って区画することなども、多くは反って園外の景を借景とし背景として利用する目的に一致する場合が多いのである」⁵³⁾と述べている。この中で「借景」は「背景」と並置され、同じように解説された。借景に関する操作は庭園内部の配置と庭園境界の整備の二つに分けられ、特に庭園布局からの考案が強調された。この論文において、外景と庭園の調和は田村によって借景の標準として位置づけられ、「調和」が借景を利用する目的として主張された。

これに似た捉え方として、吉村巖は1933年の著作に、「借景」は「庭の風景を、丁度画家が風景を描く場合に、取捨選択して、好ましい一つの画面とすると同様に、庭園の風景を構図する場合」⁵⁴⁾と規定され、この論述から取捨選択する見切りの存在の必要性の主張がみられる。さらに、借景は庭の風景の一つの材料であり庭の風景と混然しながら自分の庭を完成することに役立つものと解釈され、眺望から区別された。加えて庭外と庭内の風景の調和と統一は借景の肝要と位置付けられた。吉村はその後の研究でも同様に借景と庭の形式を一体化することを借景の要と規定した⁵⁵⁾。

田村と吉村らが主張した「調和」、「統一」と「一体」などをキーワードとした「調和論」は日本造園研究において特異のものではなく、多くの研究者がそれを借景の要件あるいは判断基準と規定した。下って西沢文隆は1975年の『庭園論』において、借景を「最初庭にあった外の景を眺望するということから始まり、景を庭の景の一部として取り入れ、これに調和されさらに発展すると、借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する」⁵⁶⁾のように三つの段階に分け、借景を眺望から区別し、調和論から主景論までの移行を主張した。その上、「借景の庭は借景と庭を区切る塀ないし額縁があって借景を美事に浮かび上がらせ庭自身はまったく自己を滅却してただの白砂の面だけになってしまえばよいということになる」⁵⁷⁾と記述し、借りて来た景が庭の主景となることが借景の終極の段階と規定した。この「自己を滅却」の状態、即ち「隠滅論」ともいえる庭園の極小化の状態は、大徳寺本坊方丈のような庭園意匠から導かれたといえることができる。

ところで西沢はこの借景の「主景論」の最初の論者ではない。上原の1926年の論文「借景とヴィスタ」は「借景」をテーマとしての最初の論文といえるが、この中で「借景」を、「この意匠は他の域外の地物を宛も自己の造園の主要構造物として取扱ふ点にあるので、この意味に於て背景とは大に異なるのである」⁵⁸⁾と規定し、借景は庭園の主景になった背景であり普通の背景と異なると定義した。次に、借景を造園の構成技法の欠かせない一つであると強調した。さらに、「万一直目的とした借景の地物が消滅した場合にはその庭園、公園は価値を失ふものとなる」との謂である⁵⁹⁾と書かれ、借景は借景の庭園において、庭園の要件さらには命脈として位置づけられた。上原の定義において、借景は背景から区別されるために、厳しく狭義のものに規定された。

上原はその後数回にわたり「借景」について言及した。1963年の『日本式庭園』には上述の借景「主景論」が継続され、借景要素論として借景対象物、自己の設計地と中間の空間という三つの大切な要素が主張された⁶⁰⁾。この借景要素論は伊藤ていじの研究によって推し進められ、屋敷内の庭園、借景の対象、見切り、そして前庭と遠景とをつなぐ要素の四つの要素が規定され、借景は眺望から明確に区分された⁶¹⁾。上原による1978年の『造園大辞典』の「借景」の項目では、前述の「借景」の定義を「借景」の第一義即ち狭義とし、箱根の旧岩崎家別荘が唯一つの理想的借景の庭として挙げられた。併せて「遠景の存在することは自己の庭の風格をよくするものであるがその取景なくとも独立のとして認められるもの」は「借景」の第二義と解説された⁶²⁾。

この「主景論」は以降の研究にまで影響を及ぼしている。渡辺康史(1980)は借景庭園について、借景は庭の主景であり借景が消滅すると庭も成立しなくなるのに対して、背景は庭園の付属物との解釈を示し両者を区別した⁶³⁾。この借景庭園の定義は上述の上原の「借景」の定義、特に第一義に相当する。しかし上原の定義は「借景」のみに対するもので、渡辺のものは「借景庭園」に対する定義である。一方で渡辺は借景庭園の項目とは別に「借景」の項目を立て、借景は眺望に近いと解説している⁶⁴⁾。このように、借景の概念上の曖昧性と混雑性がみられる。その上この

厳密な意味での借景庭園の例はほとんどないという理由で、「借景庭園」は庭園自体の完成の上に借景を取り込むこと、即ち上原の第二義に相当するものとして再規定され、円通寺、正伝寺と慈光院が例として挙げられた⁶⁵⁾。

すでに触れた西沢文隆の「自己を滅却」のように、借景を庭の命脈とみなし庭自体の消滅を意味する「隠滅論」は、借景を広義の眺望から区分し借景という概念を確立するための極端化といえることができる。一方、上述の上原の「借景」の第二義や渡辺康史の借景庭園の現実的な規定は、この厳密化を補完する余地とみることも可能である。進士五十八(1985)は、先人と同じように借景を背景から区別し庭園構成の主対象に規定し、借景の比重が最大の場合即ち借景がもし消滅してしまえば庭の生命も半減してしまう場合を「本格的な借景庭園」と定義した。「庭は借りてきた景を引き立たせるための前景にすぎぬ、というまで自己を滅却した状態」と「借景が即主景となっていなければならない」と主張し、「遠景の青山を借景とするために、庭園内は白砂を敷くだけにする」ことを典型として挙げた⁶⁶⁾。

このような次第に系統化また極端化する議論に対して、表面的な定義も散見される。「借景といふ、景を借ることである。」⁶⁷⁾「是等は何れも自分の庭を持ち、其背景として、山や森を遠く部分的、添景的に借り入れて居るに過ぎない。」⁶⁸⁾「借景というのは、庭の外の景を借用するという意味である。」⁶⁹⁾このような定義における借景は眺望に近いといえることができる。

このほかには、森蘊と長谷川正海の定義が異色である。森は1957年の『日本庭園』で、借景園を二通りに分けた。一つは敷地が高所にあり、主に刈込を見切りとし彼方の大風景を見晴らすように自分の敷地と結び付けるものであり、これまでに挙げた定義に近いが、もう一つは山岳が押し迫る敷地を前提とし、山岳丘陵の麓に池を掘り山の影を水面に映すもので、美濃永保寺と天竜寺などの例が挙げられ、独特のものといえる⁷⁰⁾。長谷川正海(1977)の研究では、借景は背景と区分され、背景が「敷地外景観と庭との間に何等の隔絶がなく庭園の地続きである場合」と定義されたことに対して、「借景」は「敷地外景観と庭との間に判然たる断絶がある場合」と規定された⁷¹⁾。こうして、庭と外景の間の視覚的な断絶があるかどうかによって、借景と背景は区別された。しかし、続いて同じ論文の中ではこの広い規定から大幅に厳しい評価へと移り、多くの研究に借景の典型として挙げられる円通寺と正伝寺などは「借景の痛痒を感じない」⁷²⁾存在と評価された。なお、森と長谷川の議論を比較すると、借景と背景の相違において、互いに矛盾が見られる。長谷川の定義に基づけば、森が第二の借景としている天竜寺などの庭園では、山は庭園の敷地と連続するため、借景ではなく背景の範疇に落ちることになる。

このような定義や議論の展開は、百花繚乱といえることができる。これに対して、「借景」の定義と概念を根本から立て直すことを試みた研究も現れた。本中真(1981)は「借景」を自然空間と庭園空間の視覚の上の連結したものと解説し、さらにこの二つの空間を相互に異なり互いに独立している空間と規定した。こうして、この二つの空間の質的な違いが借景の前提と規定された。このため、寝殿造の庭園空間と園外自然空間は同質化であり、寝殿造の庭園の眺望は借景に属していないという結論を出した⁷³⁾。借景の概念に関して、本中が注目したのは借景と眺望の相違である。しかし、借景を背景から区分することによって借景の概念を明らかにする議論は以前から既に行われて来たことでもある。また庭園空間と自然空間の質における相違を借景の前提と主張することも初めてではなく既往の「調和論」にもあったといえる。飛田範夫は1999年の『日本庭園と風景』に上原の「借景」の第一義と第二義を引用し、借景と背景の区別の問題を提示した。さらに、飛田は「実際に庭園を見て、それが借景か背景かを

表－３ 代表的な借景の定義の分類

借景概念	文献名	概要	著者	発表年
眺望論	「園苑源流考」	「借景とは園外の景物を借り来て、園中の眺望の供する」	小沢圭次郎	1898
	「京都庭園の借景」	「借景といふ、景を借ることである」	池辺武人	1935
	「借景」	「是等は何れも自分の庭を持ち、其背景として、山や森を遠く部分的、添景的に借り入れて居るに過ぎない」	何英吉	1942
	「庭の文化史」	借景というのは、庭の外の景を借用するという意味である」	江山正美	1978
調和論	「造園美としての自然と人工」	「借景や背景を利用して園景をこれと調和させるためには、庭園布局から考察するべき」	田村剛	1920
	「庭造百題」	「庭の風景を、丁度画家が風景を描く場合に、取捨選択して、好ましい一つの画面とすると同様に、庭園の風景を構図する場合」	吉村巖	1933
	「『平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園』における眺望景観の復元的考察」	相互に異なり互いに独立している自然空間と庭園空間の視覚の上の連結したもの	本中真	1981
	「借景とヴィスタ」	「この意匠は他の域外の地物を宛も自己の造園の一主要構造物として取扱ふ点にある」	上原敬二	1926
主景論	「現代和風庭園」	借景は庭園の主景であり庭園の風景の肝要になければならない	重森三玲	1969
	「庭園論」	「借りてきた景そのものが庭の主賓となり庭がそれを主軸に展開する」	西沢文隆	1975
	「造園修景大事典4」	借景は庭の主景であり借景が消滅すると庭も成立しなくなる	渡辺康史	1980
	「日本庭園と風景」	「背景の事物を構成要素として取り入れているもので、背景の事物がないとまとまりが悪くなる庭園」	飛田範夫	1999
隠滅論	「庭園論」	「庭自身はまったく自己を滅却してただの白砂の面だけになってしまえばいいということになる」	西沢文隆	1975
	「造園用語辞典」	庭は借りてきた景を引き立たせるための前景にすぎぬ、というまで自己を滅却した状態」	進士五十八	1985
その他	「日本庭園」	山岳が押し迫る敷地を前提とし、山岳丘陵の麓に池を掘り山の影を水面に映すもの	森蘊	1957
	「日本庭園要説」	「敷地外景観と庭との間に判然たる断絶がある場合」	長谷川正海	1977

判断することは非常に難しい」と指摘し、この借景と背景の区別の問題に対して、「背景の事物を構成要素として取り入れているもので、背景の事物がないとまとまりが悪くなる庭園」を借景庭園と規定した⁷⁴⁾。しかし、背景がないと仮定する定義はすでにいくつかの既往研究の「主景論」に言及され、庭園のまとまりが悪くなることを判断基準にすることにも曖昧性と不確実性があり現実的に判断しにくいと考えられる。

以上のように、近代以降「借景」の規定に関して、「眺望論」、「調和論」と「主景論」、「隠滅論」など、数多くの理論が提案されて来た（表－３）。これらの議論は、先人の結論を継承しながらも、互いに齟齬を生じることも少なくない。初期に小沢が述べたような借景の「眺望論」は『園治』に解説された借景の概念に当たり、園内から園外までの広義的な眺望に過ぎないが⁷⁵⁾、初期から現在にかけて、「借景」の定義は複雑化されかつ狭められてきた傾向がみられるといつてよい。これらの「調和論」、「主景論」、「隠滅論」のように「借景」を厳しく規定したことは『園治』の内容には余りみられない。このように様々の定義が徐々に出て来た現状は、「借景」の定義が依然として確定されていないことの表れと考えることもできる。

初期の借景の研究には眺望論があるのに対して、それ以降の研究の骨子は、主に借景を眺望や背景から区分することであったと考えられる。こうした「借景」概念の確立を目指すことは、借景を術語としてその概念と技法について学問的な体系に位置づける努力であったといえる。しかし、この体系化の進め方自体は、主に研究者の解釈に近い議論であって厳格に科学的なプロセスとは異なる。そのため、現実には借景の概念が複雑になるほど、借景と背景や眺望を区別する論理に綻びがみられることとなる。進士五十八（1986）は借景庭園の景観構造に関する研究において、様々な「借景」の定義を指摘し、その中に自身の1985年の「借景」

の定義も併記した。しかし、構造の分析の際には「借景」を「園外景観の眺望を前提にした庭園の全てを借景庭園」⁷⁶⁾と広義に規定した。これは一貫した定義により理論と現実の庭園とを扱うことの困難さの表れではないだろうか。なお、いわゆる「窮極の借景」と「本格的な借景庭園」などは現実の庭園に対して客観的には特定しがたい抽象論といえるので、この言い方に表される借景の「隠滅論」は、学術的な論の展開としてはやや極端なものと位置づけることができる。

（３）借景庭園の規定と典型構造

現在様々な庭園が借景あるいは借景庭園として規定されている。また既にみてきたように、現状において研究者による借景庭園の規定はそれぞれ異なる。同じ借景の概念を主張している研究者の間でも、規定された借景の庭園は完全に一致しない。このなかで重森三玲は特異な一人といえる。重森は借景を日本庭園の墮落の表れと批判した。重森の早期の研究において、桂離宮では一切の外景が隠されたことを指摘し、造園家は自分の技術を信じ自然の外景から力を借りる必要はないと主張した⁷⁷⁾。さらに、現実にある借景庭園自身は技術に欠けていると判断し、借景庭園は背景の力に依存し自身の芸術力が足りないという結論にまで達した⁷⁸⁾。借景の価値に対して徹底して否定的な姿勢がみられる。重森の早期の研究では大仙院、竜安寺方丈、無隣庵、大徳寺本坊方丈、松花堂庭園、稲畑氏庭園、居然亭庭園、慈光院などの庭園が借景の庭園として挙げられている⁷⁹⁾。重森の「借景」のはっきりした定義は管見では見いだせないが、借景と背景を区分する際に「あればあってもよく、無ければ無くとも差支えない庭の構成なのですから、こんな背景は一種の背景というわけです」⁸⁰⁾と指摘し、借景は庭園の主景であり庭園の風景の肝要になければならないという「主景論」の主張の一つともみなせる。続いて、重森はこの概念を基準として、平安期の平等院、鎌倉期の金閣寺と天竜寺、江戸期の大徳寺本坊方丈、正伝寺、円通寺と修学院離宮などの庭園の眺望が借景ではないと判断し、借景庭園は明治大正期の自然主義の発端とともに発展したと断言し、借景の例として無隣庵、対竜山荘、碧雲荘と平安神宮神苑などの明治大正期の東山庭園のみを挙げ⁸¹⁾、以前の自身の見解を修正した。前述の様々な既往研究に、重森と同じく「主景論」を主張した上原は借景の例として竜安寺方丈、大徳寺方丈、孤篷庵、古稀庵、無隣庵、修学院離宮などの庭園を挙げており、重森の結論との相違は明らかである。

このような借景の概念の多様性のなかでは、借景庭園もまたそれに応じて多様というしかないであろうか。あるいは多様で輪郭の不明な概念の上にも、借景庭園と称される庭園には一定の共通する特徴があるのであろうか。このことを検証するために、まず借景の概念と借景庭園の規定基準の多様性にかかわらず、これらの指摘された庭園をすべて借景の庭園として包括的に捉え、典型的な例を抽出し、その借景の構造を分析することが必要と考えられる。調査対象とした造園史研究に関する文献の中で、1891年から2004年にかけての広い時期の63点の文献から、借景庭園

表－４ 借景庭園として高い頻度で指摘された庭園

庭園名	地域	時代	頻度（63点の文献による指摘回数 の百分率）	類型
天竜寺	京都	鎌倉	14	池泉回遊
竜安寺方丈	京都	室町	21	平庭
大徳寺本坊方丈	京都	江戸初期	37	平庭
慈光院	奈良		22	平庭
円通寺	京都		22	平庭
修学院離宮	京都		16	池泉回遊
成就院	京都		16	池泉観賞
無隣庵	京都		17	池泉回遊
芦花浅水荘	滋賀	明治大正	11	築山山水式

の例の指摘が見出された。この63点の文献から、全部で95箇所の庭園が借景庭園として得られた。このうち10%以上の頻度で指摘されたのは高い順に並べると、大徳寺本坊方丈、慈光院、円通寺、竜安寺方丈、無隣庵、修学院離宮、成就院、天竜寺と芦花浅水荘の9庭園である(表-4)。作庭された時代に関しては、鎌倉期の天竜寺、室町期の竜安寺方丈、明治期の無隣庵と大正期の芦花浅水荘を除いて、すべては江戸初期の庭園である。重森の分け方によると、大徳寺本坊方丈、慈光院、円通寺と竜安寺方丈は枯山水平庭であり、無隣庵、修学院離宮と天竜寺は池泉回遊式であり、成就院は池泉鑑賞式であり、芦花浅水荘は築山山水式である。定視式と回遊式の相違からみれば、無隣庵、修学院離宮と天竜寺は回遊式に属し、他はすべて定視式に近いといえる。

この中で、頻度で上位の大徳寺本坊方丈、慈光院と円通寺(図-1)の三つは典型として挙げられるものと考えられる。三庭園の間にはいくつかの共通点が見られる(表-5)。まず三つは禅宗の寺院である。大徳寺と慈光院の二つは臨済宗大徳寺派であり、慈光院の開山の玉舟和尚はもと大徳寺の禅僧である⁸²⁾。円通

図-1 円通寺庭園の配置(重森三玲『日本庭園史大系15』より)

図-2 慈光院庭園の眺望(筆者撮影)

表-5 典型とする借景庭園

	大徳寺本坊方丈庭園	慈光院庭園	円通寺庭園
時代	江戸初期	江戸初期	江戸初期
流派	臨済宗大徳寺派	臨済宗大徳寺派	臨済宗妙心寺派
庭園様式	平庭枯山水	平庭枯山水	平庭枯山水
建築様式	書院	書院	書院
刈込境界	方形	方形	方形
立地	平地	コンケープ	コンケープ
奥行き	6-8メートル	4メートル	9メートル
眺望距離	9キロメートル	11.5キロメートル	6.5キロメートル
眺望方向	東	東	東
主な指摘者	上原敬二、重森三玲ら(主に主景論)	重森三玲、西沢文隆ら(主に主景論)	伊藤ていじ、進士五十八ら(主に隠滅論)

寺は臨済宗妙心寺派に属している。次に三者は小規模の枯山水定視式庭園といえる。さらに構成要素に関して、伊藤ていじ⁸³⁾によると、三者とも庭園、借景の対象、見切り、前庭と遠景とをつなぐ要素の四つの要素が存在している。三者の見切りはすべて刈込である。前庭と遠景とをつなぐ要素は、大徳寺本坊方丈と円通寺は木の幹であり、慈光院は柱と軒である。加えて、この三庭園はある程度建築の付属物に近く、スケールは余り大きくない。庭園の眺望方向に対応する空間の奥行きについてみれば、大徳寺本坊方丈の東庭は約6-8m、慈光院は約5m、円通寺は約15mである⁸⁴⁾。これに対して、眺望対象までのスケールとの関係に着目し、庭園から眺望される山までの距離を指標に検討すると、大徳寺本坊方丈から比叡山までの距離は約9km、慈光院から城山までは約11.5km、円通寺から比叡山までは約6.5kmであり⁸⁵⁾、庭園の規模に対して眺望の距離はそれぞれ概ね千倍に及ぶスケール比である。さらに庭園自体の空間の特徴をみれば、これらの庭は囲繞性を持ち方向性が明確な空間と考えられる。大徳寺本坊方丈庭園では、西は方丈の建物があり、南と北は塀が置かれ、東は低い刈込といくつの高い木が配置され、東方へ開放する庭園空間として構成されている。同じように、慈光院と円通寺にも東方へ開放する庭園空間が成立している。以上から、三つの庭園に、庭園の規模の小ささ、眺望距離の大きさ、庭園空間の方向性の三つの特徴としてまとめられ、これを端的に表現すれば「小中見大」即ち「小」の中から「大」を望む意匠として整理することができる(図-2)。

九つの庭園の中で、三庭園のほかの竜安寺方丈、成就院と芦花浅水荘はこの「小中見大」の空間意匠に近いといえてよい。ただし円通寺などと比べると、庭園空間の方向性は比較的弱い。特に成就院の場合は庭園空間の囲繞性は高くなく、軒端からの眺望は一定の方向へのものではなく開放的である。さらに主な眺望方向に対する庭園の奥行きは約24mに対して、庭園から眺望対象の湯屋谷までの距離は約100mであり、眺望距離の「大」と庭園の「小」の比率は比較的小さく、この「大」は余り大きくないといえてよい。

この「小中見大」の空間意匠に近い概念は既往の庭園研究にも指摘されている。円乗寺について、小沢(1900)は「庭中数畝に不過、杜鵑花を残れり、蓮池は庭に接す、数萬畝一目に了すべし」⁸⁶⁾と指摘し、「数畝の庭」から「数萬畝の景」を一目瞭然すること、即ち「小中見大」に等しい空間意匠として捉えている。

またこの空間意匠と上述の借景の「主景論」や「隠滅論」あるいは「本格的借景庭園」の概念には、いくつかの共通点がみられる。確かに大徳寺本坊方丈庭園のような「小中見大」の庭園空間では、外景が主景であり、庭園自体は小さく配置も単純であり、いわゆる庭園の「隠滅」という概念が比較的理解されやすく、庭園と建築の空間が組み合わされた眺望の装置が構成されていると考えられる。「眺望論」から「主景論」、「隠滅論」までの展開は、先述のように借景という概念を規定する過程における理想化・極端化の表れであり、借景庭園としてよく良く挙げられる大徳寺本坊方丈庭園と円通寺などのような庭園はこの理想化の傾向に合致する典型であるといえてよい。

さらに、このような「小中見大」の眺望装置の庭園意匠は、日本庭園の借景の特質であると考えられる。芸術におけるいわゆる「小中見大」という概念と表現は中国造園において古くから存在してきたが⁸⁷⁾、このように庭園を眺望装置として設計する手法は、現存する中国庭園にも、古文獻にも見付ることができない。特に『園冶』ではこのような意匠はない。そうすると、「主景論」や「隠滅論」などの「借景」の定義は日本庭園の独自の特徴を反映した議論の展開であったといったほうが妥当と思われる。

5. 「借景」のプロモーション『園冶』の普及過程について

既に触れたように、小沢の論文には園冶という言葉が作庭や庭園の意味として用いられていたが、一方で中国において園冶という言葉は常用の言葉ではなかったといつてよい⁸⁸⁾。しかし小沢が使った「園冶」は唯一の例ではなく、「明治庭園記」にも「則園冶能事畢矣」⁸⁹⁾と書かれている。さらに、「園冶」の使用例は明治期の文献にもいくつか確認され(表-6)、たとえば湯本文彦は『平安通志』に天竜寺に関して「本寺の園冶は所謂嵯峨流の蘊奥を究むと謂ふ」⁹⁰⁾と記述し、本田錦吉郎は「庭園の話」という論文に園冶の言葉を取り上げ、「此園冶即ち園芸の事…」⁹¹⁾と解説した。『日本国語大辞典』によれば、園冶という言葉は二つの解釈がある⁹²⁾。中国最古造園書の項目の他に、庭としてかざったものと庭園の解説も見られる。例として文学者の坪内逍遙(1885)の『小説神髓』と内田魯庵(1889)の『詩文の粉飾』が挙げられ、二つには「園冶」は「建築」と並列された。たとえば坪内は「所謂有形の美術は絵画、嵌木、織(おりもの)、銅器、建築、園冶(エンヤ)等を一ひ」と記しており、園冶は有形美術の一種であり庭園の意味であったことがわかる。

このように明治期に園冶という言葉が作庭や庭園の意味として用いられたことは偶然ではなく、『園冶』の造園書の普及と関連する可能性が高いと推測できる。さらに既に触れたように小沢などの初期研究者は『園冶』から「借景」を取り入れたことが判り、「借景」の展開は『園冶』の普及に影響されたと推測できる。したがって、『園冶』という古本の普及、特に明治大正期ごろの『園冶』の流布を明らかにする必要があると考えられる。

中国からの『園冶』の伝来に関しては、大庭侑の唐船持渡書の研究の中に、元禄十四年(1701)に持ち込まれた一部三本の『名園巧式奪天工』、正徳二年(1712)の一部四本の『園冶』と享保二十年(1735)の四部の『奪天工』の三点を見付けることができ⁹³⁾、これは橋川時雄の論説にも指摘されている。

次に、日本の図書館検索システムと橋川時雄などの先行研究により、現在残る古版『園冶』として確認できるのは約10点である⁹⁴⁾。このうち刊本は2点のみであり、国立公文書館蔵の『園冶』と橋川家蔵の『木経全書』である。国立公文書館蔵のものは

表-6 明治期以前における園冶という言葉が確認された文献

発表年	文献名・著者	園冶の意味	掲載文献
1830	「嬉遊笑覧」喜多村信節	書名	
1884	「園冶の間」「園冶の答」	作庭	「大日本美術新報」
1885	「小説神髓」坪内逍遙	作庭	「日本国語大辞典」
1889	「園芸考」横井時冬	書名	
1889	「詩文の粉飾」内田魯庵	作庭	「日本国語大辞典」
1893	「園冶の話」前田健次郎	書名、作庭	「日本美術協会報告」
1895	「平安通志」湯本文彦	作庭	
1896	「園芸小考」森鷗外	書名	
1899	「園苑源流考」小沢圭次郎	作庭	
1905	「庭園の話」本多錦吉郎	作庭	「日本美術協会報告」
1910	「支那絵画小史」大村西崖	書名	
1916	「明治庭園記」小沢圭次郎	作庭	

中国の研究者によく知られている日本内閣文庫本『園冶』であり、公文書館の解説によればこの『園冶』は明代崇禎七年(1634)の序刊即ち初版である。元々この『園冶』は紅葉山文庫の蔵書であり、後に内閣文庫に移管されたもので、先の正徳二年(1712)に伝来した『園冶』に当たる可能性が高いと考えられる。橋川家蔵の『木経全書』は1970に『園冶』というタイトルで出版され、橋川の解説も含まれ、日本では近代以降最初の刊行である。『木経全書』の扉には「隆盛堂梓行」と確認できるが、中国と日本のどちらで刊行されたかは判断し難い。橋川の考察により『木経全書』は明版の『園冶』と同じ刻版で印刷され⁹⁵⁾、中国からの伝来版と推測できる。

国立公文書館にはもう一つの『園冶』が存在し、橋川も指摘している。この『園冶』は明版の『園冶』と同じように上、中、下の3巻3冊で構成されている。表紙にタイトルとして「園冶」と書かれ、「昌平坂学問所」という印がある。扉には「名園巧式奪天工」がタイトルとして、右側に「松陵計無否先生著」、左側に「華日堂蔵書」と記されている。同様の扉の表記は他に三つの版に見られ、一つは元森鷗外の蔵書が現在東大総合図書館に収蔵され、他の二つは現在国立国会図書館に収蔵されている。この四つはすべて写本である。この中、国立公文書館の『園冶』は「昌平坂学問所」の印に表れているように元来は林家(大学頭)の蔵書であり、巻三の末に「寛政七年以近藤重蔵本謄録」と書かれ、1795年に作られた写本である。この四つは同じ版即ち「華日堂版」であり、国会図書館所蔵の1巻のみの残本以外の三つは3巻が全て揃っている。なお、三つの全本には同じように、巻三の「借景」の章節の末のページに数箇所文字が抜け落ちたところがあり、完全な版と比べて⁹⁶⁾、右から四行目に二番目の「月」、三番目の「書」と四番目の「窗」の一部分と、五行目に四番目の「過」、五番目の「刻」、六番目の「曲」と七番目の「掃」の一部分が欠けている。

表-7 日本における『園冶』古版の所在

標題(表紙)	標題(扉)	写本・刊本	巻	版	元所在	所在	収蔵時期	参考
園冶	無	刊本	3巻3冊	明崇禎七年(1634)序刊	紅葉山文庫	国立公文書館	江戸末	「園冶」序文、橋川時雄解説、公文書館解説
不明	名園巧式木経全書	刊本	3巻3冊	隆盛堂版	不明	橋川時雄		橋川時雄解説
園冶	名園巧式奪天工	写本、寛政七年以近藤重蔵本謄録	3巻3冊	華日堂版	昌平坂学問所(林家大学頭)	国立公文書館	江戸末	橋川時雄解説、公文書館解説
無	名園巧式奪天工	写本、江戸末明治初	3巻1冊	華日堂版	森鷗外	東京大学	大正15年	
奪天工	名園巧式奪天工	写本、江戸	3巻3冊	華日堂版	宮川文庫	国会図書館	明治28年	
園冶	名園巧式奪天工	写本、江戸	1巻1冊(第1巻)	華日堂版	白井氏蔵書	国会図書館	昭和15年	
園冶	無	写本、江戸	3巻3冊	華日堂版	不明	国会図書館	明治38年	
園冶一名奪天工玉池仙館本	無	写本	3巻3冊	華日堂版	不明	京都大学	昭和39年	
園冶	無	写本、江戸	2巻1冊(第1、2巻の一部分)	不明	不明	国会図書館	昭和17年	
奪天工	無	写本	1巻1冊(第2巻)	不明	不明	関西大学	不明	

このほか国会図書館に「華日堂蔵書」が書かれた扉のページがない3巻3冊の『園冶』があり、巻三の「借景」の章節の末のページも同じ状況である。さらに、京都大学図書館には3巻3冊の『園冶』が保存されている。この表紙には「玉池仙館本園冶一名奪天工」と書かれ、扉のページはなく、巻三の「借景」の章節の末のページも同じように欠けている。これらのことから、上記の6点の写本は同じ原本から写されたか、あるいは相互に抄され、原本の巻三の「借景」に関する章節の末のページに欠落が生じたと推測できる。つまりこの6点の写本は華日堂刊本の版と同じものといえるが、この華日堂は中国清代の刊行所であり⁹⁷⁾、この版は中国から伝来したものであると考えられる。

このように10点中8点の内訳は、約明代初版、隆盛堂版と華日堂版の三つの版があり、すべて中国からの伝来版である(表-7)。ほかの2点は残本であるから、具体的版を確認し難いものの、第2巻の図を分析すると、華日堂版を基準とした写本である可能性が高いと考えられる。そのため、江戸時代に『園冶』が日本において刊行されたことはなく、写本の形式で伝わったと推測できる。したがって普及の範囲はごく限られていたと考えられる。10点の中に、現在公共図書館に保存されているのは6点であり、国立公文書館に2点と国立国会図書館に4点保存されている。これらの公開時間は異なっている。国立公文書館に収蔵された明版の『園冶』を元来保存していた紅葉山文庫は江戸時代の図書館の一種といえる。紅葉山文庫は江戸初期から発端した。将軍の利用が第一義であり、申請に応じて幕府諸機関やそれに関係する学者・幕臣および尾張藩・加賀藩なども利用できた⁹⁸⁾。明治維新以降、紅葉山文庫の蔵書は太政官文庫から内閣文庫に引き継がれた。国立公文書館に収蔵された華日堂版の『園冶』は元来昌平坂学問所の蔵書であった。昌平坂学問所は寛政年間に始まり、林羅山及びそれ以降の林家が大学頭として主宰していたが、将軍に仕える武士のための学校であり、藩士などの外来人にも公開された⁹⁹⁾。この昌平坂学問所の蔵書と上述の紅葉山文庫が内閣文庫の根幹であるといえる。明治維新以後、昌平坂学問所の蔵書は複雑に変遷し、1872年から「書籍館」で一般の閲覧は許可された。この書籍館は日本最初の官立公開図書館とされる¹⁰⁰⁾。紅葉山文庫の蔵書は宮城内の旧書庫に保存されたままであったが、1884年に内閣文庫(1885年12月以前の名称は太政官文庫であった)の所管になった¹⁰¹⁾。内閣文庫は1884年に設立され、本来諸官庁の参考図書館であり諸官庁のみに開放されていたが、1907年から一般にも部分的に開放された¹⁰²⁾。国立国会図書館に見られる4点はすべて帝国図書館時期に購入されたものである。図書館の印により、4点が購入された年はそれぞれ1895年、1905年、1940年と1942年である。この中の一つには「宮川文庫」、もう一つには「白井氏蔵書」の印が見られ、購入以前は私人の蔵書であったと推測される。

江戸期に『園冶』は写本の形式で伝えられ、紅葉山文庫のような特定の対象に公開された図書館にも保存されたが、数も限られており公開された範囲も一定の階層に限られていたことから普及の範囲は余り広くないと考えられる。1872年に書籍館の公開によって、『園冶』という本は初めて一般の眼に触れるようになり、近代化以来の公共図書館の発展とともに広がっていたといえる。上述の作庭や庭園の意味として用いられた園冶という言葉が明治期の美術と文学の出版物に出現し始めたのは、明治期に『園冶』という書物が普及したことによる影響のためと推測できる。近代以降で最初に『園冶』を意識したのは美術界である可能性は高いといえる。日本における『園冶』の状況を初めて中国の学者に伝えた大村西崖も美術史家であるが¹⁰³⁾、この時期に『園冶』が公開されたことによって、借景という用語と借景の概念の受容と展開が進んだと考えられる。

6. 文学にみる「借景」

造園の専門分野だけではなく、日本の近代文学にも「借景」は用いられるようになった。たとえば和田利男(1972)が著わした『文苑借景』という本がある。はしがきに著者は先ず「借景」に関して、造園法の借景を「前景に、あるいは背景に、山や林や川や湖沼など、自然の雄大な風景を取り入れて庭園の美を完成させる工夫」と解説し、光悦寺と円通寺を典型的な例として挙げた。次にタイトルに使われた「借景」を「私の専門である中国文学という苑の前景に、多くの場合日本文学がなんらかの形で姿を見せられている」と解釈した¹⁰⁴⁾。ここでの「借景」は比喩の一種であり、近景と遠景の視覚的な結び付きを意味している。このほかにも「借景」は日本近代文学評論において多くの論者に用いられていたが、中でも大輪靖宏と柄谷行人は代表的な二人とされる¹⁰⁵⁾。

大輪靖宏(1981)は芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天河」という俳句を分析する際に、「俳句の借景性」を指摘し、俳句と庭園の共通性を示した¹⁰⁶⁾。大輪によると、俳句は独立した価値を持っている文学形態であるとともに、与えられた背景の違いによって味わい変化することが文学的な長所という。つまり、俳句は日本の借景庭園と同じように背景と敏感に反応し合うという特徴である。さらに借景庭園に関して、「庭園それ自体も独立した芸術的価値を有しているが、低い塀の外側に広がる山などの遠景と調和することによって一層の価値を増す」¹⁰⁷⁾と述べた。こうした庭園と共通する借景性は俳句だけではなく、物語、歌舞伎あるいは和歌などの形態にもみられる。庭園にも俳句にも、背景は重要であるが、存在しなくても自身の価値は存在し別の味わいを示すことになる。柄谷行人(1998)も「借景に関する考察」の論文に、俳句の借景性即ちそこにはないものを指し示すことを指摘した¹⁰⁸⁾。柄谷行人によると、庭園の借景は外的な風景が庭を通して見られることであり、巨大な自然を一種のレンズを通して縮小することに当たり、さらにいえば、庭園は表象装置である点で絵画や文学と共通しているとされる。

以上のように、文学評論において「借景」が造園学から借りられ、鑑賞対象とその背景の関係を論述する際の修辭的表現として用いられた。両者に共通している点は、借景の本質を対象(前景)と背景の結び付きと相互の反応に置いていることである。よって、文学評論に用いられた「借景」は借景の「隠滅論」と比べると、余り厳しくなく、意味が広い概念であるといえることができる。大輪が述べたように、これらの借景の概念は「調和論」あるいは「主景論」に近いと考えられる。

文学評論による借用だけではなく、文学者による庭園の借景そのものへの興味もみられる。文豪森鴎外は既に1896年に庭園史の考察の中で、借景にも及び、借景は自然の山水に依頼し庭園と自然の混交したことでありと指摘した¹⁰⁹⁾。ほかに、山本健吉(1977)は修学院離宮と円通寺を訪ねたことを記録し、両者の借景を特筆した¹¹⁰⁾。注目すべきことは、山本健吉の描写だけでなく、先の和田や大輪の叙述にも庭園の借景に関して「雄大」あるいは「壮大」などの形容が用いられていることである。多くの造園研究者の叙述にもこのような言葉がよくみられる。さらに、柄谷は借景の庭園は巨大な自然を窺う道具として解説し、対象の巨大さと庭園の微細さの関係について意識的な比較を行っている。このように文学の分野においてもこの風景の雄大さは借景の理想的な状態と認識されており、先の借景の「小中見大」の典型的な構造との合致がみられる。

7. 結論

「借景」は最初に『園冶』ではなく黄庭堅の詩集によって中国から伝来した。『園冶』の伝来より前に「借景」は日本の文献に用いられていた。万里集九の『帳中香』は日本における「借景」

の濫觴である可能性が高い。

しかし、造園の領域における「借景」の発端期は明治期である。明治期に、「借景」が次第に論じられるようになり、小沢の「園苑源流考」によって「借景」は日本の庭園及び造園研究に結びつけられた。この時期の借景の概念は『園冶』に解説された概念に近く、遠距離の眺望に当たるということができる。明治期に「借景」はこの時期の『園冶』の普及によって展開したと推測される。その背景には明治期からの近代美術と庭園研究と造園学の萌芽というまでもなく、明治期に近代公共図書館の発端と古籍のパブリック化ということも見逃せない要因として挙げられる。『園冶』の「借景」は日本における「借景」の嚆矢ではないが、明治期以来の造園研究における「借景」は『園冶』から取り入れられたと考えられる。

近代以降の造園学の展開に伴い、「借景」に関する定義や議論が多く重ねられてきた。「借景」と「背景」の区別の仕方を底流として検討すると、借景の概念は明治期の眺望に当たる借景の概念と比べると、次第に狭く、厳しく、複雑に規定されてきたことがわかった。このプロセスは「借景」を造園学の高度な専門用語として確立することであった。この系統化と専門化の確立過程において、極端化の傾向が多少みられる。その結果借景の概念は『園冶』における借景の概念から離れてきた。これまでに様々な概念が現れたが、「借景」の定義はまだ十分に成立していないのが現状といえる。

「借景」の定義はまだ曖昧である。数多の既往研究で借景に結び付けられた庭園は非常に多く、性格も様々である。その中で、代表的とされる庭園、たとえば大徳寺本坊方丈庭園などは「小中見大」という空間意匠として整理することができた。このような庭園の例は「借景」の様々な定義との間にいくつかの関連性がみられ、『園冶』の借景の意匠とも中国の庭園意匠とも異なっている。このように、日本の造園における借景の概念は『園冶』から離れ、日本庭園自身の意匠として展開してきたと考えられる。

補注及び引用文献

1) 陳植 (1988): 園冶註釋: 中国建築工業出版社, 247
2) 本中真 (1981): 「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復元的考察: 造園雑誌 44(4), 203-219
3) 小野健吉 (2004): 日本庭園辞典: 岩波書店, 134
4) 雑誌に関しては、『庭園』などの造園系雑誌を除いて、主に東京大学の「明治新聞雑誌文庫」を利用し調査を行った。具体的には以下の雑誌を調査対象とした。『大日本山林会報告』、『建築雑誌』、『園芸新誌』、『園芸世界』、『日本園芸雑誌』、『園芸之友』、『日本園芸会雑誌』、『園芸時報』、『国華』、『日本美術』、『東洋美術』、『京都美術協会雑誌』、『京都美術』、『錦菰雑誌』、『大日本美術新報』、『日本美術会報告』
5) 20点は以下の専門図書である。『庭造百題』(吉村巖, 1933), 『日本の庭園』(森蘆, 1957), 『日本庭園』(吉村巖, 1958), 『日本式庭園』(上原敬二, 1963), 『借景と坪庭』(伊藤ていじ, 1964), 『庭と空間構成の伝統』(堀口捨己, 1965), 『庭 (日本の美術)』(早川正夫, 1967), 『庭園論Ⅰ』(西沢文隆, 1975), 『日本庭園要説』(長谷川正海, 1977), 『庭の文化史』(江山正美, 1978), 『造園大辞典』(上原敬二, 1978), 『庭に生きる』(重森三玲, 1978), 『造園修景大事典』(編集委員会, 1980), 『最新造園大百科事典』(八田準一, 1984), 『造園用語辞典』(編集委員会, 1985), 『日本庭園史新論』(大山平四郎, 1987), 『間の美学—日本の表現』(末利光, 1991), 『借景 (日本の美術)』(本中真, 1997), 『日本の庭園と風景』(飛田範夫, 1999), 『日本庭園辞典』(小野健吉, 2004)
6) この作業では、小沢圭次郎と黒田謙の著作を中心として横井時冬と本多錦吉郎などの著作も検索した。この時期における庭園論者は他にも挙げられるが、検索の結果小沢と黒田の著作がこの時期において他の論者に比べて早期に出版されていたため、特に重点をおいた。
7) 古典籍について、他に二通りの文献調査も実施した。一つはデータベースと索引であり、主に国文学資料館の全文データベースと日本随筆集成索引及び隠元、芭蕉などの様々な中世からの名家の著作や全集の索引を検索した。もう一つは古語辞書、主に江戸古語の辞書を対象に借景などの言葉を探査した。しかし、これら二つの調査からは結果が得られず、古典籍では「借景」は常用された言葉ではないと推測される。
8) 伊藤ていじ (1964): 借景と坪庭: 淡交社, 117

9) 周宏俊ら (2011): 中国造園における借景という用語の展開と構成: ランドスケープ研究 74(5), 389-394
10) 川瀬一馬 (1977): 古辞書概説: 雄松堂書店, 54
11) 芳賀幸四郎 (1957): 五山文学の展開とその様相: 国語と国文学 34(10), 110-118
12) 同上
13) 万里集九 (室町): 帳中香, 第十三之下: 慶長・元和年間刊本
14) 借という字に関して以下のように解釈された。「借、子夜切、假也、又助也、漢朱雲少時借客報仇。又貸也、推奨也、亦作藉、又昔韻。」毛居正 (宋代): 増修互注禮部韻略, 卷四: 清文淵閣四庫全書本。「借、子夜切。賈山傳、借秦為論。假借、假借納用、文帝紀。資借、威德可資借、谷。不借、草履曰不借、釋名言賤易有宜各自高不假借也。前箸借、張良借前箸籌之、詳著…酒誰借、白酒已盡誰能借、坡。遮道借、徇為潁川守、微為執金吾、上過潁川、百姓遮道、願借寇恂二年、乃留拜之、本。車不敢借、阮裕曰、吾有車而使人不敢借、何以車為、命焚之、詳車。」陰時夫 (元代): 韻府群玉, 卷十六去聲: 清文淵閣四庫全書本。「借、假也。左、願借助焉。亦作藉、前高紀、從田橫藉助兵入閩。」陰時夫 (元代): 韻府群玉, 卷十九入聲: 清文淵閣四庫全書本。言い換えれば、借という字は二通りがあり、「去聲」の発音の場合は主に借りの意味で、「入聲」の発音の場合は助けの意味で解釈される。「借景亭」の「借」は「當官借景未傷民」のように使われ、対象物の所属や所在の変更を隠喻し、助けより借りの意味で解釈されるべきと考えられる。
15) 内山精也 (2006): 万里集九と宋詩: アジア遊学 8(93), 111-121
16) 同上
17) 万里集九 (室町): 梅花無尽藏, 卷三上: 玉竹村二 (1972) 編: 五山文学新集第6巻: 東京大学出版会, 750
18) 同上, 785
19) 万里と同様に五山文学者の琴叔景趣も「酬業叔詩」の「序」に「借」の字を用い、借りの意味で、「借景」の概念に近いといえる。「余就今之南淵借隙地一區、以營堵室、且復借山借水借煙雲、花時借花、雪時借雪、以為我有、我有者成造物之無儘藏也。」琴叔景趣 (室町): 松蔭吟稿: 塙保己一 (江戸) 編: 統群書類従, 第13輯: 経済雑誌社
20) 佐藤昌 (1991): 中国造園史: 日本公園緑地協会, 476-477
21) この状況について一つの証拠が見られる。松平定信は「菟裘録」という文章に清代の李漁の『閑情偶寄』を挙げ、『閑情偶寄』からの影響を強調した。この文章にも、『閑情偶寄』の「居室部」と同様に、建築、庭園、装飾などの内容が述べられた。『閑情偶寄』の「居室部」で「借景」は要点として解説された一方で、松平定信の「菟裘録」では「借景」は一切言及されなかった。松平定信は作庭家ではないが、浴恩園の築造を監督するなど造園の素養を持っていたとみられるため、「借景」への言及がないことは「借景」が稀であった当時の状況の反映と考えられる。松平定信 (江戸) 著、江間政発 (1893) 編: 楽翁公遺書, 下巻: 八尾書店; 李漁 (清代): 閑情偶寄: 上海古籍出版社
22) 小林治人 (1995): 酔園小沢圭次郎—伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」: ランドスケープ研究 53(8), 245-248; 小板橋二三男, 進士五十八 (2010): 小沢圭次郎 (酔園) の東京府立園芸学校に於ける造園教育について: ランドスケープ研究 73(5), 786-795
23) 陳從周ら編集した『園綫』は、晋代から清代までの325点の園記が収集され、中国の古典園記の大集成といえる。このなか、約83点の園記に園内から園外までの眺望は記述されたが、借景という用語は一切言及されなかった。周宏俊ら (2011): 中国造園における借景という用語の展開と構成: ランドスケープ研究 74(5), 389-394
24) 小沢圭次郎 (1895): 園苑源流考: 国華 69号, 404-411
25) 小沢圭次郎 (1897): 園苑源流考: 国華 98号, 33-40
26) 小沢圭次郎 (1893): 園苑源流考: 国華 40号, 78-80
27) 小沢圭次郎 (1894): 園苑源流考: 国華 63号, 283-290
28) 小沢圭次郎 (1895): 園苑源流考: 国華 66号, 346-350
29) 小沢圭次郎 (1898): 園苑源流考: 国華 109号, 15-20
30) 小沢圭次郎 (1895): 園苑源流考: 国華 70号, 430-432
31) 同上
32) 陳植 (1988): 園冶註釋: 中国建築工業出版社, 51
33) 小沢圭次郎 (1898): 園苑源流考: 国華 109号, 15-20
34) 小沢圭次郎 (1892): 園苑源流考: 国華 28号, 85-88
35) 小沢圭次郎 (1901): 園苑源流考: 国華 132号, 228-234
36) 上原敬二 (1972): 解説園冶: 加島書店, 3
37) 佐藤昌 (1991): 中国造園史: 日本公園緑地協会, 477
38) 秋里離島 (江戸): 都林泉名勝図会: 竹村俊則 (1979) 編: 日本名所風俗図会 7(京都巻Ⅰ): 角川書店, 232
39) 竹村俊則 (1979) 編: 日本名所風俗図会 7(京都巻Ⅰ): 角川書店, 468
40) 秋里離島 (江戸) 著、上原敬二 (1972) 編: 都林泉名勝図会: 加島書店, 4
41) 秋里離島 (江戸): 拾遺都名所図会: 竹村俊則 (1981) 編: 日本名所風俗図会 8(京都巻Ⅱ): 角川書店, 310
42) 秋里離島 (江戸) 著、上原敬二 (1972) 編: 都林泉名勝図会: 加島書店, 58, 107
43) 小野健吉 (1987): 対竜山荘庭園における小川治兵衛の作庭手法: 造園雜

- 誌 50(5), 13-17
- 44) 黒田譲 (1907): 江湖快心録続: 山田芸草堂, 7
- 45) 黒田譲 (1903): 京都名勝記: 京都市参事会, 123
- 46) 小沢圭次郎 (1891): 園苑源流考: 国華 26 号, 39-46
- 47) 最初東大で造園の講座が開設された後, 京大での講座開設は 1920 年代であり, 高等園芸学校 (現千葉大学園芸学部) では 1930 年代のことである。上原敬二によって東京造園高等学校が設立されたのは 1924 年である。造園修景大事典委員会 (1980): 造園修景大事典 5: 同朋社, 81
- 48) 同上, 101
- 49) 小板橋二三男, 進士五十八 (2010): 小沢圭次郎 (酔園) の東京府立園芸学校に於ける造園教育について: ランドスケープ研究 73(5), 786-795
- 50) 当時以下の論文が次々に掲載された。田村剛 (1916): 造園術と林学: 大日本山林会報 403 号; 上原敬二 (1917): 森林美学と造園術: 大日本山林会報 410 号; 田村剛 (1917): 造園の起源と芸術としての造園: 大日本山林会報 413 号; 田村剛 (1917): 建築的造園の真髄: 大日本山林会報 414 号; 上原敬二 (1917): 造園用語集 (第一): 大日本山林会報 417 号; 上原敬二 (1917): 造園用語集 (第二): 大日本山林会報 418 号; 田村剛 (1917): 風景美と造園美と人工林の美: 大日本山林会報 419 号; 上原敬二 (1918): 庭園の字源的解釈: 大日本山林会報 426 号; 上原敬二 (1918): 造園用語集 (第二): 大日本山林会報 428 号; 上原敬二 (1918): 造園における花候学の価値: 大日本山林会報 433 号; 上原敬二 (1919): 造園における樹木の生長: 大日本山林会報 436 号; 田村剛 (1920): 造園美としての自然と人工: 大日本山林会報 446 号; 田村剛 (1920): 現代文明を背景として見たる造園: 大日本山林会報 450 号
- 51) 田村剛は以下のように書き, 造園学が大正期の前にはまだ成立していなかったということの意味した。「吾国で造園術が学者の注意を惹く様になったのは, 極最近の事であるし, 未だ学術的研究の見るべきものもないのであるが, 兎に角造園術が立派な芸術として認められたのは事実である。」田村剛 (1916): 造園術と林学: 大日本山林会報 403 号, 1-11。さらに, 造園の定義に関して, 以下のように述べられた。「造園術は植物, 岩石, 泉水等自然物と亭榭, 橋梁, 灯籠, 手水鉢等の建設物とを材料として, 一定の位置と面積との上に, 理想化された風景又は建築的構造を製作する技術である。」田村剛 (1916): 造園術と林学: 大日本山林会報 403 号, 1-11。この論述から, 造園の概念は伝統的な作庭技術を基礎として整理されたことが判る。
- 52) 小沢圭次郎 (1898): 園苑源流考: 国華 111 号, 52-60
- 53) 田村剛 (1920): 造園美としての自然と人工: 大日本山林会報 446 号, 10-17
- 54) 吉村巖 (1933): 庭造百題: 明文堂, 82
- 55) 吉村巖 (1958): 日本庭園: 朝倉書店, 14
- 56) 西沢文隆 (1975): 庭園論 I: 相模書房, 325
- 57) 同上, 327
- 58) 上原敬二 (1926): 借景とヴィスタ: 造園学雑誌 2(1), 121-127
- 59) 同上
- 60) 上原敬二 (1963): 日本式庭園: 加島書店, 108-109
- 61) 伊藤ていじ (1964): 借景と坪庭: 淡交社, 135-139
- 62) 上原敬二 (1978): 造園大辞典: 加島書店, 389
- 63) 造園修景大事典編集委員会 (1980): 造園修景大事典 4: 同朋社, 105
- 64) 同上, 105
- 65) 同上, 106
- 66) 東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会編 (1985): 造園用語辞典: 彰国社, 233
- 67) 池辺武人 (1935): 京都庭園の借景: 庭園と風景 17(10), 342-343
- 68) 何英吉 (1942): 借景: 庭園 24(10), 417
- 69) 江山正美 (1978): 庭の文化史: 文一総合出版, 28
- 70) 森籙 (1957): 日本の庭園: 創元社, 164-165
- 71) 長谷川正海 (1977): 日本庭園要説: 白川書院, 136
- 72) 同上, 140
- 73) 本中真 (1981): 「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復元的考察: 造園雑誌 44(4), 203-219
- 74) 飛田範夫 (1999): 日本庭園と風景: 学芸出版社, 187-189
- 75) 初期の借景の概念と『園冶』の借景の概念の合致は, 小沢の定義だけではなく以下の上原の解説にもみられる。「云ふまでもないが其の要素は恒存的のものであって例へば天休, 氣象等即ち風景となって表はれては雲とか晴嵐とかは造り得ることは出来ずして借景するまでである。」雲と晴嵐などを借景の対象に取り入れたことから, 概念規定の曖昧性と主観性をみるることができる。これは『園冶』に述べられた「因借無由, 觸情俱是」の特徴に当たると考えられる。借景の概念について, 上原は『園冶』から影響を受けたと推測される。上原敬二 (1918): 庭園の字源的解釈: 大日本山林会報 426 号, 1-19
- 76) 進士五十八 (1986): 「借景」関する研究: 造園雑誌 50(2), 77-88
- 77) 重森三玲 (1931): 日本庭園に於ける塀及び籬の役目: 風景と庭園 13(1), 24-28
- 78) 重森三玲 (1940): 近代日本庭園に於ける「自然」への理解: 林泉 7(73), 36-42
- 79) 重森三玲 (1927): 京都名園の芸術的価値: 庭園 9(10), 16-19; 重森三玲 (1931): 私の好きな庭園一つ: 風景と庭園 13(2), 24-25; 重森三玲 (1936): 中井氏居然亭庭園と平井氏霊鷲山荘庭園: 林泉 2(21), 257-264; 重森三玲 (1936): 慈光院の庭園及茶席: 林泉 2(23), 319-350
- 80) 重森三玲 (1969): 現代和風庭園: 誠文堂新光社, 153
- 81) 同上, 152-153
- 82) 重森三玲 (1936): 慈光院の庭園及茶席: 林泉 2(23), 319-350
- 83) 伊藤ていじは 1964 年の『借景と坪庭』で, 借景に関して庭園, 借景対象, 見切りとつなぐ要素の論調を主張し, 大徳寺本坊方丈, 慈光院, 円通寺と修学院離宮などの様々な庭園についての分析を行った。
- 84) 庭園の奥行きは以下の文献内の実測平面図を使用して図上計測した。重森三玲 (1936): 日本庭園史図鑑, 江戸初期一: 有光社; 重森三玲 (1936): 日本庭園史図鑑, 江戸初期四: 有光社; 重森三玲, 重森完途 (1978): 日本庭園史大系, 江戸初期の庭二: 社会思想社
- 85) 眺望対象までの距離は地形図を使用して図上計測した。国土地理院 (1969): 5 万分 1 地形図 15, 京阪地方: 国土地理院
- 86) 小沢圭次郎 (1900): 園苑源流考: 国華 125 号, 94-96
- 87) 中国基本古籍庫での検索の結果から, 「小中見大」という用語はすでに宋代に存在したが, 主に明代と清代に文学評論によって用いられたことが判った。他に, 絵画と庭園の評論にも使用された。「小中見大」は諸種の芸術に共通する概念であり, 有限の時間あるいは有限の空間に無限を表現する意味であるということができる。庭園についての例として, 以下の論述は有名である。「若夫亭台樓閣, 套室回廊, 疊石成山, 栽花取勢, 又在大中見小, 小中見大, 虛中有實, 實中有虛, 或藏或露, 或淺或深, 不僅在周回曲折四字, 又不在地廣石多徒煩工費。」沈復 (清代) 著, 羅宗陽 (1981) 校点: 浮生六記: 江西人民出版社, 20
- 88) 中国基本古籍庫により「園冶」をキーワードとして検索し, 結果として明代と清代と民国の時代から 9 点を得た。この中で造園書のタイトルと重複を除くと, 作庭や庭園の意味で用いられたのは 3 点しかない。一つは「観省野物, 登臨園冶, 緩歩代車, 無事爲貴, 又其幸四也」である。樊深 (明代): (嘉靖) 河間府志, 卷二十四人物志: 明嘉靖刻本, 470; もう一つは「三曰不得強占官民場泊園冶」である。陳鶴 (清代): 明紀, 卷三: 清同治十年江蘇書局刻本, 66; さらには「觀山上怪石如牛馬如熊羆者, 不可殫紀, 園冶間得其一二足稱奇玩, 棄置荒山, 遂無知者可爲太息」である。張貞 (清代): 杞田集, 卷四: 清康熙春岑閣刻本, 51
- 89) 小沢圭次郎 (1915): 明治庭園記: 玉利喜造等 (1975) 合著: 明治園芸史: 有明書房, 329
- 90) 引用された部分は古宇田実の「庭覗き」という論文に『平安通誌』から引用された文章であり, 『平安通誌』自体は確認できなかった。古宇田実 (1906): 庭覗き (五): 建築雑誌 20(237), 565-580
- 91) 本田錦吉郎 (1905): 庭園の話: 日本美術協会報告 168 号, 15-26
- 92) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部 (2001) 編: 日本国語大辞典, 第二巻: 小学館, 787
- 93) 大庭侑 (1967): 江戸時代における唐船持渡書の研究: 関西大学東西学術研究所, 245, 708, 719
- 94) 陳植は『園冶全釈』の序文に 1920 年代に東京帝国大学の本多静六のところで明版の三巻三冊の『園冶』を見たことを指摘した。しかし, 現在の東大の諸図書館・研究室の蔵書からは存在が確認できなかった。ほかに, 「涉園陶氏依崇禎本重印」と標示された『園冶』もあり, 京都大学と京都工芸繊維大学の付属図書館の蔵書にみられた。この版の『園冶』は陶湘 (号涉園) によって明版に基づいて 1930 年代に刊行され, 日本にも流入してきた。
- 95) 橋川時雄 (1970) 解説: 園冶: 渡辺書店, 34
- 96) 橋川の『園冶』を完全な版として比較の基準に使用した。
- 97) 中国国家図書館の検索システムで「華日堂」をキーワードとして検索した結果は 1 点を得た。清代の伍涵芬が書いた『偶詠草續集』は, 康熙四十年に華日堂において刊行されたことが記録されている。この『偶詠草續集』は「四庫全書存目叢書」に収集された。他に, 同じ著者の『読書樂趣』という本は民間の古籍競売に見られ, 康熙三十七年華日堂刻本と標示された。
- 98) 国史大辞典編集委員会 (1992) 編: 国史大辞典, 第十三巻: 吉川弘文館, 850
- 99) 国史大辞典編集委員会 (1986) 編: 国史大辞典, 第七巻: 吉川弘文館, 608-610
- 100) 国立公文書館 (1985) 編集: 内閣文庫百年史: 汲古書院, 31-32
- 101) 同上, 30
- 102) 同上, 14
- 103) このことは橋川時雄の解説と陳植の『園冶全釈』に載られた闡鐸の序文に指摘された。
- 104) 和田利男 (1972): 文苑借景: 渙乎堂, 1
- 105) 染谷智幸 (2005): 西鶴小説論: 翰林書房, 548
- 106) 大輪晴宏 (1981): 俳句の借景性: 上智大学国文学論集 14, 41-60
- 107) 同上
- 108) 柄谷行人 (1998): 借景に関する考察: 批評空間 2(17), 35-46
- 109) 森林太郎 (1973): 鵠外全集, 第二十三巻: 岩波書店, 271-274
- 110) 山本健吉 (1984): 山本健吉全集, 第四巻: 講談社, 283-286

(2011.7.28 受付, 2012.1.20 受理)